宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番
定価 一年 送料共500円

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
九三七二番
振替口座京都一五八九一番

群社末内境

御本殿の周囲に二十四社の摂末社が鎮り給う。

延宝年間に整備せられ、宗像郡一円はもとより、鞍手、遠賀、粕屋、嘉穂各郡に鎮座した当社の摂末社七十五社、百八神を此の処に元宮として奉斎したものと伝う。

神領宗像の地に祭られた社が、すべて宗像大社を本宮として敬仰した、厚い信仰の姿がここにある。

（写真は　摂社に神饌をお供えする巫女さん）

松尾神社 醸造報賽の祭り行わる

正月桜も咲き匂い、万物に活気をよみがえらせる小春日和の三月十九日。恒例の北筑杜氏組合の主催による酒造報賽祭が当社の末社、玉垣横に鎮り給う酒の神、松尾神社に於て斎行された。

昨年春までは楼門前の築山の上に鎮座ましましたが、駐車場拡張の為、旧阿弥陀経石跡に移され、今年は第一回目の醸造奉告祭である。

この祭は新酒の醸成を無事に終えた報賽の祭りである。当日は、三十余名の参列者があった。

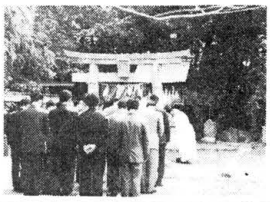
杜氏さんを始め、吟酒を献上する面々の顔には、無事大任をはたしえた喜びが溢れていた。

松尾神社の前には醸造の新酒が多く供えられる。この一本に夫れ〳〵の感慨が籠められている。昨年十二月末より米の選定から造りこみにいたるまで、酒の繊細な味美味しさには、やはり長年の経験と感とが大きくものを言っている。

それだけに杜氏さん方が長い間家人と離れて室屋にこもり、ただ一心に酒造りと取り組む生活は、言葉に言い表わせない苦難の仕業である。

喜びにも、悲しみにも口にされる酒、なくてはならぬ酒、杜氏さんの手にして来た新酒は、今年も無事に迎える事が出来た生活歴ともなっている。

祭興後、一同斎館で組合の総会を開催、会務報告、諸行事等について打ち合せた後、神社から心尽しての水炊きで懇談会に移った。やがて興の至るや、お互の酒の出来を喜び合う声が嘆やかれ、そして中にも此の道一筋に打ち込む男の真摯さが窺われた。家にあっては良き家庭人の杜氏さんも、師走よりこの日までは文字通り勝負の世界に生きる男となる。この厳しさから始めて今日の歓びと安らぎが生れるのである。この為であろうか、杜氏組合の会合には世の常の組合の集りとは異った親密さと家族的な雰囲気が感じられる。かくて日本の酒はこの暖い空気の中から泉の様に溢れ出るのである。午後四時過ぎ盛会裏に散会した。



阿蒙少言

「今晩は・森繁久弥です」のラジオ番組。全国の聴取者、特に青少年から、現代の複雑な世情に生きる悩みや、相談の手紙が寄せられ、彼は自己の人生観や、生活体験から、懇切な意見を述べている。「弱い気持は禁物です。進んで難局を切り開いて下さい」の三益愛子の誌上回答。芸能人ではあるが、そこに商売を離れた親切が滲み出ている。職業的人気による点もあろうが、公式的な理論で顔をつくらった学者の意見よりも、遥かに情味があって、芸能人もこゝまでゆけば、単にミーハー族を楽しませる演芸商売ではなく、その豊かな人生経験から生み出された芸術でもある○何人も人生の午後四時には、貴重な芸術を身につけている。次代に訓え伝えておくべきものは、無駄にしまい込んではなるまい。日が暮れては、医者の手おくれ、後生安堵の念仏は日が暮れてからでもよい。坊さんに手おくれはない○合格、就職、落第失業と生きとし生けるものの避けがたい優勝劣敗の絵模様を描いて、三月は去る。陽春四月天地の発潮たる生気の躍動に、新しい希望が甦えるならよい。但し運賃はじめ、諸物価の上げ潮に、赤子だ、火の車だと訴えながら、派手な衣裳をまとって行楽にうつゝを抜かすと、交通事故も上げ潮になりかねない。地獄は手加減のない所、ご用心○「現代の生活には厳粛さを感ずる機会がない。心をひき緊めて考える一時が、折々あってよい」と或る来訪者の感懐。これは特に青少年にとって大切なことであろう。年中瞬時も厳粛さを感ずる機会のない現代の若い人達は、生活態度を崩し易く、獄扉の制裁に自己反省のチャンスを得たのでは、もう遅い。詳しくは考えればわかる○「落第の罪は最後にテレビ負い。」

（白雲）

第五十九回 宗像大社献詠歌会詠草

三月六日　於社務所詠草到着順

戸畑　田中ハツセ
大企業のみによき、政治と訴えて人ごみの中を車過ぎ行く

福岡　高橋　昇
青春を入試に喰はれる今の子等国の行末荷ふは誰ぞ

陵厳寺　真鍋　万三
人の世に性は天に受け質は地に恩儀と至誠を守りて暮さん

門司　永島　まち
絵にほしき和布刈の山の雪影色毛糸あむ手もしばし忘れて

村山田　吉田佐市郎
珍らしや雪の許斐の朝景色木々も草野も映ゆる白妙

津屋崎　麦野　時雄
茶に生きる人が住へばアパートも佗と寂との満ち満つる庵

福間　井原　元彦
アンテナの竿の高さよ都をば遠くはなれし山の湯の宿

東郷　藤崎　辰子
根に敷きしまろき小石の冷たきに山茶花の紅群かりて散る

戸畑　伊規須ゆき
車一つ通れば避けて立ちとまる店先に並ぶ柿のうつくし（俵山にて

香椎　織田　橡雨
うらやすの所としりてや水禽の群れてぞ遊ぶ大濠の春

田熊　小野　花居
待ちわびる春を招きて柳芽のふくらむほとり百鳥の声

〃　小野角次郎
立春の木々の梢はかゝやきて境内広く鎮まり給ふ

厚狭　篠田　南洞
生れたる子が先ず腕を伸ばしつつ指広げたり五本の指を

福間　森　八蔵
六つの花静かに積る朝景色神古りませる辺津の宮殿

吉田　占部　由久
生も死も神にゆだねて日々を祈りと感謝にくらすしあわせ

大濠　江崎　琴子
棕櫚竹の枝もたわゝに積む雪をはらへば音のさらさらとして

深田　中野　節子
フェーン現象とテレビ報ずる風の一日畑土のかはきにジャガ薯植ゆる

勝浦　永島　計七
山茶花の崩れ落ちたる狭庭にも春の息吹き見えて充分

津屋崎　小田　茂造
病む我をせき立つること春暁の出漁の波音いよいよ高し

吉留　白木うめの
危惧の念云ふべきにあらず予備試験受けゆく吾子に守持たする

福岡　吉田　信夫
姉となる孫のかなしさ留守居して祖母に添寝の目覚めがちなる

遠賀　長畑　房江
去る真際我が塵籠のほこ捨てし夫の今朝は糸島に居る

宮田　北原きみ子
集い来し友と別れの街角にネオン凍てつく歩道を照らせり

〃　片山　朔子
わが帰えると告ぐれば鏡台に向わせて髪束ねくる、末妹と愛し

大井　安部　重郎
白銀の雪降り積みてはじめての足跡きざむ我楽しかり

〃　安部　静子
母の忌に集ふはらからあれこれと話はつきず夜も深みけり

〃　吉田　杏子
流れに生ふ芹の緑も色増しぬ峡の草戸も春来たるらし

勝浦　永島　文子
健康のすぐれぬ父は既に古稀越すに骨折る喩路なるらむ

大井　木原　房子
日の差して春積む雪のかがやけば梅の雫はプリズムに似し

徳重　石松や寿子
裏伊勢の御名もかしこき神垣に小鳥のあそぶ宗像の宮

〃　〃
如月の深雪ふみわけひたすらに身の幸祈る産土の神

別府　土性　とよ
冬枯れの枝に下がりて雨に風に去年より落ちざる枯葉一つが

宮田　片山　一
暁春のしづもる家に有放の前奏ありてその日始まる

武丸　立石ろせの
冬枯のにらの株間に青き芽の日毎にのびて春近づきぬ

〃　立石　昇
吾子にしてなどかゝること解せぬやと言ひ募りたるあと心重しも

（四頁へつづく）

一説論一　美人優先

美人でありたいことは、女性最大の願望であろう。特に若い層は何人も、自身を相当の美人と自己判定する己惚れを持っている。そこで美人論に就いてこんな話が出た。

「女性は美しいと賞めると、口先では否と謙遜する。心中ではその通りだと喜んでいながら、とんでもないと否定する。ではさほど美しくないような物言いでもしたら大変。それこそ恨み骨髄に徹するだろう。若しも劇場や集会の場所に、美人席を設けて麗々しく表示したら、一体腰をかける者があるだろうか。」

甲論乙駁して、かゝる場合の女性の態度は、年齢性格職業によって異るとの結論。これは他愛もない茶呑み話に過ぎないが、本稿でいさゝか指摘したい所は、美人ならでは夜の明けぬ国と無暗に美しい女性を礼讃し、不美人を劣等視する意図ではなくて、男性にも自己を美人とする己惚れと、それによる自家撞着とがあることである。

現代は美人なる語句を、美しい女の意味に用いているが、古い時代の漢語は善人賢者を意味していた。即ち美は善や秀の内容を持ち、美徳美談美味等の美は今日の姿形の美しいという言葉の意味でなくて、善いとか秀れるとかの類である。だから昔は美人は男性にも用い、美しい容姿の女性に限っては美女と言っていた。人格の秀れた男性は所謂男ぶりは悪くとも美人であった。今日の男性にも老若を問わず美人は存在する。

どの社会でも、美人は衆に優先すべきである。と言っても嫌悪に値する己惚れや強慢さをもって、他を押しのけて美人席に陣取ることを肯定するのではなく、又それは美人でもない。学徳や能力が真に秀れていて、他を指導するに適わしい人物は、政治経済教育芸術等いづれの分野に於ても、埋れることなく優先して欲しいのである。これを美人優先と言いたい。

ところで美人でない粗悪な醜類が、優先するから種々の困った問題が起る。殊に政治とこれに関連する選挙の場合、醜類優先の被害は著しい。

最近福岡県の或る町に発生した町長議員の逮捕事件は、新聞雑誌に報道されて広く話題を撒き痛烈な批判を浴びたが、これなどは選挙という泥仕合こまかしごっこに、美人に化けた醜類が優先したことに町政紊乱の根抵がある。汚職の端は刑務所誘致。町内に刑務所を設置して、町長先ず率先して入獄の範を示すつもりでもあるまいが、明治の初期、刑法を制定した当時の司法卿江藤新平が、佐賀の乱に捕って自ら作った刑罰の適用をうけた話に似て、まことに皮肉な巡り合せと見られる。

西欧の多数決主義や権利主義を基底とする政治思想によって、発展してきた選挙制度が、長い東洋道徳の歴史の中に生きてきた慣習や法制に適合し難いのは当然である。就中わが国の民族感情は互譲謙遜を美徳として称え、善良なる風習となって育てられてきた。然るに西欧流の選挙は立候補を必須の条件とし、候補者は自称美人になる。互譲どころではない。他をこきおろして自己の優秀さを誇示し、心にもない甘言や醜い手段を弄して、自称美人は当選による権勢慾の満足を獲んと盲進する。公明選挙などのお題目は、まさに画餅の戯賛に過ぎない有様である。

尤も優先してもらいたい美人は、泥仕合の選挙など嫌忌して名乗りを上げようとしない。東洋的道義思想と西欧的権利主義との大きな誤差は、今日の政治手法によっては修正さるべくもあるまい。美人コンクールの自己顕示性に似たものである。

前述の拘引町長の近くの村に、数十年前それと対照的な名村長があった。五十年百年先の民生の安定を考えて、村政の財源を豊にするため、村内を説得して治山治水に苦心した。植林に最も意を用い、当時は村民の悪口も聞き抵抗もうけたが、結果は立派に実を結んで、今日学校その他の施設は森林の財産で、餘裕綽々と賄われている。次代の利福に心血を注いだ美林村長は、優先して欲しい美人村長であった。

平素の挨拶では、謙譲の徳を具えているかに見えても、権勢慾名誉慾の前には醜態を偽装糊塗して恥じない傾向は、ひとり政治面だけではない。官公庁会社はじめ各種の職場や組織体に於ても、美人席に争って着きたがる不美人が多い。不美人が要職を占めると官公庁の汚職となり、事業の衰運破滅となる。美人席は真の美人に優先してもらいたいものである。美人評価の基準は、単に才能ではなくて、誠実と努力にその重点が置かれなければならない。

観光に湧く神湊

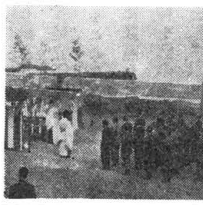
――相つぐ旅館街の新増築――

昭和三十九年十月旅館から発した炎は未曾有の大火となって神湊の中心部を焼きつくした。為に政府は災害救助法を適用し罹災者の救護に努力した。

その後興は順調に進み、一年后には焼失家屋の殆どは再建したかくて昭和四十年の秋風が玄海洋上を過ぎる頃、魚屋再建の声が巷間に噂された。これに鞭を接するが如く、神湊は突如として旅館の新増築ブームとなった。

新築営業中　二軒
新築中　四軒
増築中　三軒

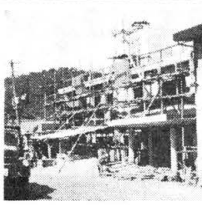
この内容は、極めて多彩で鉄筋四階で大浴場を有するヘルスセンター、九州一を誇る岩風呂、玄海の潮を利用した砂湯等様々なアイアが秘められている。しかし今回のブームの特徴は、何と言っても旅館の大型化デラックス化で又、凡ての旅館が駐車場を有すること

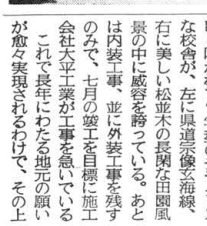


である。

いうまでもなく、神湊は魚料理が新鮮低廉佳味な点で有名であり、当社の参拝を済ませた方々の大半が神湊へくりつろうと云うコースをとっている。

昨年度の神湊を訪れた観光客は六二、〇〇〇人（玄海町観光協会調べ）で本年度は大型旅館の出現で、これに倍する人数が予想されて、しかし現段階では、この希少過ぎる観光条件の使命を制するのは博多の間地に位し現在開発中の産業道路の開通により両市より三〇分余りの時間で一日の遊楽を楽しむことが出来る。亦日帰客松の海岸線は、仕事に疲れた都人士の憩いの場としては最適であろう。従来夏場のみの観光地であった悩みは、唐辺都市（森林都市、福間、東郷のマンモス団地）の勃興によって一挙に解決されることになる。





宗像大島の長老　藤島浅太郎翁の俤

宗像大島の長老藤島浅太郎翁は、去る三月十日に、八十七歳の天寿を全うして逝去された。会長の職を恵まれた生涯、平凡と言えるかも知れぬが、幸福な人間の常道であったと思う。

翁は少年の頃から鍛冶職の修業をされた。離島の明治時代、極めて必要な、そして新しい仕事であった。翁は老年に達するまで、営々とその業に精励し、村民の信頼も厚かった。大正初年、選ばれて氏子総代となり、昭和二年大島村の村長に推され、三十七年まで熱心に両宮の発展に貢献されたのである。

その間、大正五年から昭和八年まで、村会議員を勤め、また民生委員、畜産組合長、選挙管理委員長、調停委員などの要職を歴任し、村の徳望家が就任する公職をほとんど引き受けた。特に昭和十二年から戦直前までの世情の繁雑難しい時期に、選ばれて名誉助役であったことは、一見平凡に見える翁が決して村の平凡な存在でなかったことを物語っている。

翁の長男一夫氏は小倉に出て、早くから食堂を経営して成功して居られる。翁もひとり島におくことを楽しで、度々小倉移住をすすめた様子が、神社や、村の世話役に満足する翁は、動かれなかった。立派な隠居部屋を造っての迎えには、さすがに断りがたく思われたが、三十九年夏永年住なれた島を去られたのであるが、都会の生活は健康に合わなかったようで、糖尿病がちと聞いていた。

「こんなに弱るなら、父を大島においておけばよかった。孝行がかえって当人の迷惑になったようだ」と、令息は漏した由。

玄洋をわたる春風に、在りし日の好々爺藤島浅太郎長者の俤を偲びつつ、この談話室に一管を綴った次第である。

玄海小学校　統合校舎建設進む

昨年九月十七日、玄海町田島の南校舎の統合を目的に、松林の美しい釣川のほとり、牟田尻の里に地鎮祭を斎行、建設の第一歩を開始した玄海小学校統合校舎は鉄筋コンクリート三階建。総工費八千二百万円の規模のもとに槌音も高らかに建設が開始されその後工事も順調に進み、基礎工事も完了、鉄筋コンクリートも打ち込まれ、最早枠木も取り除かれてT字型のデラックスな校舎が、左に県道宗像玄海線、右に美しい松並木の長閑な田園風景の中に威容を誇っている。あとは内装工事、並に外装工事を残すのみで、七月の竣工を目標に施工会社大平工業が工事を急いでいる。

これで長年にわたる地元の願いが愈々実現されるわけで、その上小学校では九州随一と云われる近代的設備をそなえた校舎は、さぞかし生徒の教育増進に役立つに相違ない。統合校舎が完成すると、田島小学校は廃校となる模様である。この小学校は神社に隣接しており、旧境内地でもあるので、町当局は神社に返還したいとの意向を明らかにしている。

社務日誌抄

三月一日　月次祭
斎行。西鉄楠根社長参拝。麻生藤市氏来社、春祭り催物賞品を集めて下さるとの事
二日　孔大寺神社祭、本多権祢宜奉仕す。県文化会館副館長他四名来社、日本古代美術展に当社神ノ島神宝出陳について
七日　責任役員会開催。吉武儀平部氏他五名出席。昭和四十一年度予算並びに今年度新規事業について
八日　NHK国際局斎藤氏外数名来社。国際放送で当社を紹介しようというもの
九日　臨時職員会、新分課分掌について、これで当社は儀式、庶務、経理に分たれ、夫れ〳〵人事移動を行う。読売新聞来社。国宝猿犬を撮影取材す。
一二日　氏子評議員会年前十時半より開催於社務所。自衛隊十九名特別参拝。
一四日　出光宝物館長他二名来社宝物館予算及び事務打合せの為。
一五日　月次祭斎行。
一七日　宗像警察署署長来社、春祭奉納弓道大会開催打合せの件。
一八日　出光興産上月永文氏来社。高松宮御行啓女官二名参拝、後宝物館参観。鐘崎漁協献上若布持参。
一九日　松尾神社祭、楠本祢宜、大野権祢宜奉仕。北筑酒造社氏組合員参列。
二一日　祖霊社祭、斎藤権祢宜奉仕。

参拝道愈々舗装へ

国道三号線から当社への参拝道は、東郷橋河畔と、東郷駅東口からとの二線があるが、東郷橋河畔から釣川沿いの県道の一部がこの程漸く舗装される見通しになった。

今迄は晴天にはほこりがひどく雨天の時は泥道と化して参拝者泣かせの道であったが、今年から数年のうちに、この悩みも解消される事となった。この舗装については、以前から神社及び町当局は県に対して陳情して来たが、この要望が漸く実を結んだわけである。

道路の幅も七米になる予定で、国道と同等以上の道路になるとの事である。この為釣川線は当分の間通行止になる模様である。

これに伴って東郷橋河畔に在る当社第一鳥居は副員がやゝ狭いので、移転の必要に迫られている。解体後は適当な処に再建する予定である。

この道は現在、中間の丸二屋橋の掛替工事が施工されており、四月中旬には完成の予定で、この後に舗装工事に着手するとの事である。この為釣川線は当分の間通行止になる模様である。

四月のまつり

二一日　春季大祭
いよいよ実際の農耕作業やあらゆる産業の活動期に入るに当って今年の無事繁栄を願って祈願祭を行う。大社では、昔からこの時機に宝物の整理を兼ねて展覧を行って来た。俗に「ホゾン会」と言っているのはここから来ている。

二日　献茶式、献詠歌会
三日　奉納剣道大会
奉納弓道大会
奉納舞踊会
三日　宮地嶽神社春祭り
商売繁盛の信仰をあつめる津屋崎町宮司の宮地嶽神社は、当大社の旧社である。
三日　玉子神社祭
旧社社主子神社春祭り。
七日　徳山宗像神社祭
出光興産徳山製油所に鎮斎した宗像神社の春祭り。本宮より職員の直礎社であるため、全山頂まで職員が祭典に参向する。山頂からの眺望は格別で、宗像三円が見渡される。菜の花の鳥瞰は美事である。
五日　沖ノ中両宮春季大祭
漁撈繁栄と海上安全を祈って斎行される。
七日　徳山宗像神社祭
出光興産徳山製油所に鎮斎した宗像神社の春祭り。本宮より職員が参向して祭典を奉仕する。
一五日　月次祭、午前十時
一六日　織幡神社春祭
鐘の岬に鎮座せられる旧社織幡神社の春祭り。本宮より職員が参向する。地元の鐘崎一帯は漁止めとなり、終日お祭りを楽しむ慣習になっている。
二九日　天長祭　午前十時
今上陛下の御誕生を祝し、聖寿の万歳と国家の平和を祈る祭り。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話　宗像局2027番
有線277－1

宗像四郎氏貞（三十五）

山下半可　作
福田長庵　画

楢葉の末（六）

陶入道が寺内沿部宛に渡した下知状にはこう書いてあった。

氏続御父子の御身体について調べの儀、今度秀郷（寺内沿部）歟切の趣き、氏任（許斐三河守）尚道（中村筑後守）註進候、誠に以て貧与有るべく候、仍て尾州様（陶入道尾張守）より座主御坊（社務職）に対し、御書を以て仰せつかわされ候、重畳辛労の儀に候と雖も、持参有り緊急に成就候様、相調べらるべき事肝要に候、中略、其の心得を得べく候、恐々謹言

天文二十二年三月十六日　寺内沿部参殿へ

明らかに氏続と子代松丸に対して訊手を差し向けるべし、との下知状であった。

寺内は家中を見守っていた。下知状を貰ったのが三月の末。じっと待っているうちに、山田経雲はますます増々たくましく、氏続父子を討とうという者はますます出て来なくなった。

春が過ぎ、夏がめぐった。その夏も過ぎ、秋が訪れた。誰も応募する者がいない。この上は寺内自身が出向く外はない情勢となって来た。沿部は手勢を集めようとして準備にかかった。沿部にとっても此の事は余り気の進まぬことであった。宗像の家中は没義道なとはしたがらない。従って陶入道の下知状を貰った自分自身がこのことを強行しなければならない。

いつも此のような問題が発生する度に沿部が先頭に立たなければならないことを、彼は半ば宿命的なものと思うのであった。

ところが沿部が動く必要はなくなった。志願者があらわれたのである。志願者の名を土橋民部という。彼は民喜入道氏続の甥であった。氏康の申し出は中国の陶入道にも聞き届けられた。氏康が手勢を引き連れて彦山に向かったのは、師走も半ばの頃であった。

自分が傍観の態度を取ったならばこれは戦国の時代風潮の一つであったかもしれない。権威に対する胡麻すり男は何時の世にもあったのである。

冬になった。氏康の申し出は中国の陶入道にも聞き届けられた。氏康が手勢を引き連れて彦山に向かったのは、師走も半ばの頃であった。

伯父の氏綱は仲々見つからなかった。漸く玉屋谷杉坊にそんでいることを聞き出すのに数日を要した。

杉坊の尊主は、氏続の事情をよく心得ていた。宗像勢が殿入したことを聞きつけて氏続を裏口から逃がした。しかし追手を内を知っていた。裏手に廻っていた数人が「それっ」と追跡した。

氏綱はいつしか大竹殿の中に入り込んでいた。そこへ氏康が追いついた。

「氏康か。」

「伯父上。」

交わされた言葉はこれだけであった。氏康が「それっ」と云う間もなく氏綱が脇差を抜いた。

冬、彦山三千の僧坊とり囲き出す顔々たる鐘の音の中に、氏続は、わが甥の手にかかって立腹を切って果てたのである。時に天文二十二年十二月二十日のことであった。

家中の一部では、このことを喜んだ。子男氏貞の将来のために大きな障碍となっていたものが除かれたと思ったからであった。

「此の上は、千代松殿は今三歳の嬰児だりとは誰も助け能くべき事ならず。」

家中のこの論議が千代松丸の母弁ノ前の耳に入った。

弁の前が隠れていた館手の沼口から千代松丸を抱いて逃げたことを知り、早速、討手が差し向けられた。

いくら必死でも女の足は遅い。弁ノ前は破手郡若宮の山口の河原で追いつかれた。討手の者も其の場での惨劇を予想していた訳ではなかった。

「若君を渡し給われ」と云うと、弁ノ前はひしと抱きしめて唯泣くばかりであった。

「致仕方なし」

討手の者はそこで母子共に害してしまった。時に天文二十三年。

（つづく）

世界最大のタンカー「出光丸」建造進む

一月三十一日、世界最大のマンモスタンカー出光丸（二十一万トン）の起工奉告祭が斎行された。

この出光丸は出光興産が石川島播磨重工業に発注したもので、同社横浜第二工場で造られることになっている。全長は三百四十二メートルで、東京駅よりも六十六メートルも長く、上甲板の面積は後楽園球場の一、五倍と言うケタはずれに大きいもので、これを動かす機関部はエンジンが三万三千馬力、スクリューの直径は、七、八メートルである。これの完成までの総工費は五十四億円となり、これからの予定日

二月一日　起工式
八月　進水式
十二月下旬　完成

となっている。完成後はペルシャ湾と出光興産徳山製油所を結ぶ大動脈となる。

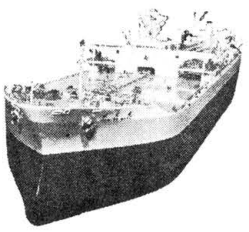
現在世界最大の船は、東京丸（一五万トン）で出光丸はこれを上廻ること六万トンの巨船である。海の技探、船の叱咤から見れば、これ以上の船を造ることは技術的に不可能との由であった。

当日の奉告祭に参拝された小石陸夫副工場長外三名の現場関係者は参拝後の感懐をこもごも次のように述べられた。「私共にこの度出光丸の御用命がありましたことを深く光栄に思っています。本日関係者一同御社に参拝致しまして、この森厳なるたたずまいの中で、出光丸完成の上に神明のあらん事を祈願しましたことは、将来ずや心の上に大きい支えとなることでしょう」

続いて三月二十四日、出光興産より門田重役、石川島播磨重工より大久保、谷村の両氏が早朝に参拝され、出光丸がつつがなく竣工されるように又日章丸オリンパス号の航海安全を併せて祈願された。

顧みれば、往古宗像大神の鎮座まします海北道は国の文化の大動脈として民族の生命源となった。また今日宗像大神の護り給う中近東と日本を結ぶこの巨大なるパイプラインは国の産業の生命線となっている。

かくの如く吾が大神の御神威は国の進展の上にあまねく光被し給うところとなっている。



（写真は出光丸模型図）

拝啓　南天の雪に埋れる影色も早や過ぎて、早春の心尽き季節を迎えし今日此の頃様方益々御健勝にて御過ごしの事と御慶び申し上げます。追而私事昨年九月末日を以って西銀門司支店長を最後に停年退職となり現在小倉区富野荒古山全九州観光株式会社の常務として下関、彦島を眼下に六連、馬島、あいの島、二おい島（男島、女島）白島遠く益井島亦玄海を中

名付けの依頼が続々

当社では誕生した赤ちゃんの名付親を引き受けているが、好評で、最近では申込みが続いている。

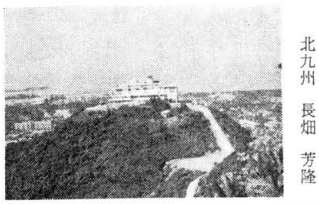
先般、出光興産福岡支店の上月永文氏から二世の命名を是非お願いしたいとの申越しがあった。

斎戒黙考する事数日して揮者は次の通り命名した。

命名の所見

この漢字は御承知の如く中央の央で、いずれにも片よらず、正常なる地位を意味していますが、それより寛容が延ばされて、ひさし（ひさし）やわらぎ（和）等の快き用法があります。詩経の小雅篇に「曰旆央央」とあって、純白に山陰の山影と山水の景観、五千万ドル夜景の美は私は東洋一入れる展望大浴場、展望喫茶室等色々設けてありますので、是非御利用下さい。

北九州　長畑　芳隆



尚当社の内容は二百人が一緒に「臼旆央央」とあって、純白

便り

御友人との憩いの場として勿論に近距離で最適の場所ではないかと思考します。早速別府や、霊仙に替れる処として御利用下さい。

あまり商売的になりましたが実は前述のような理由で、西銀を退職致しましたので貴所発刊の宗像月刊をこれから当方に御送り下さるよう購読料を添えて御願い致します。

宗像大社宝物館

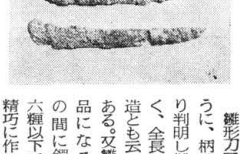
宝物を訪ねて

工具

これ等の刀子、斧等は祭祀用品として神前へ奉る為に製作されたものといわれている。

刀鍛冶の中には実物を製作する前に、その多数の雛形を焼いて品質を判定する事が行なわれている。

刀子類の製作意図が右のいずれに依ったかは判然としない。



刀子八口は、図示されているように刃の部分には線彫の文様を刻み、柄は別に懸通しの孔を作っている。

これ等は実用的に作ったものと考えられる。

雛形刀子は前者のように、柄、刃とはっきり判別し難いものが多く、全長五糎以下の模造にも云うべきものである。双雛形鍔は刀状品になると、刃と柄の間に鍔を付け全長六糎以下ではあるが、精巧に作ってある。

梯形袋鉄斧は、全体が空洞となった袋状の古墳からも良く出土する。しかし一般古墳出土の斧は袋部の断面が楕円形をなしているのに対し、この斧は梯形（台形）をなしているのが特徴である。

鉄斧片は残片のみであるが、通常の実用鉄斧と考えられる。大形鉄斧片も破片であり、原形を全く備えていないが、楕円形の袋部のあったことは推定出来、これによく似た例が大阪の黄金塚古墳に見られる。

雛形鉄斧は全長約二三糎で、長方形の鉄板の一方を折り曲げて袋部を作った云う簡単な鉄鋌目的に製作されたものである。

これ等古代の斧は現代に見る斧と異なり、斧の頭部の袋状の部分に曲った柄を付け、使用したものと考えられる。

ガイドさんも勉強

宗像大社宝物館に於て

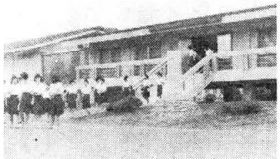
小春日和の一日、バスガイドさん達が当社宝物館を拝観した。

宗像大社参拝の方々が多くなるにつれて、貸切バスの便も頻発になり、ガイドさん達も良く勉強しておかなければと云うので、此度の宝物館拝観となったもの。

「宗像大社は、この田島の辺津宮と、大島の中津宮、それに玄海の美しい旗が長くあざやかになびく様を表現しています。永久（ひさかみ）と語呂が通じますが、愛児の御名を呼ばれる場合、父子相似たひびきが一層親愛の情を強めるようがにと敢て央をひさしと訓んだ次第です。

薄く浮かぶ沖の島の沖津宮、この三宮を一体として、宗像大社と申しあげるので御座います。この宝物館に展覧してある品々は、全て沖津宮に捧げられたもので御座います。今から凡そ千五百年程前の事で……。」なめらかな饒舌の声が響く。テキストを片手に話しているのは先輩格のガイドさん、聴き入るのは教習生の面々、宝物を見る眼差しも真剣そのもの、案内の若手広報も熱心に説明していた。

宝物館の玄関には川辺のねこ柳が芽を吹き、幸の花が日射しを浴びて眩しいばかりに咲き誇っていた。



◇宗像高校卒業式…1日午前10時、第十七回の卒業式。卒業生は普通科四百九十九人、被服科五十二人、合計五百五十一人。

◇文集"ちなご"第十号発行…津屋崎町勝浦小学校（斉藤武校長・二百二十人）の学校年誌文集"ちなご"の四十一年版をこのほど発行した。全校生の短い作文と詩をのせている。

◇お別れ遊戯会…福間町松原の大善寺貴志幼稚園は6日午前9時半から隣りの大善寺本堂で開き、劇や遊戯、歌など午後3時すぎまで父兄ぐるみで楽しんだ。

◇成人病予防講話…宗像町村山田老人クラブは10日午後2時、村山田公民館に坂本宗像保健所長を招き話を聞く。

◇ミカンせん定巡回講習…宗像東部農業改良普及員が10日、宗像町王丸、野坂、11日同町東郷、吉

町村往来

ある体験

（完）

私は新聞、ラジオから隔絶され、原爆の恐ろしさを知らずにいた為に、又多くの人々と交友大きな幸いであった。それらはなお私の意思に反し、或は意識の外で起ったことである。強いて言えば、私の意思は斗病の気力だけであった。然しこれも、当時は合理性を尊び、必然のみを信ずるようになった。人々は人生に軌道を敷き、その上を走る。然し軌道はかりが人生であろうか。生死の筆頭は勿論のこと、進学、就職、恋愛、結婚等々処世上到る所に予期せざる偶然が大きく働く場合が多い。幸運、不運、禍福さまざまである。最善として進んだのゆとりを漸く持ち得るに至って道が忽ち窮し、凶と観じたその後に思わね吉を見出したり、「人間万事塞翁の馬」「禍福はあざなえる縄のごとし」の古語は今尚生きている。

退院して我家に落ちつき、久し振りに新聞の記事を読み、始めて原爆の恐ろしさを知って我身の好運を悟った。神々への感謝の念が、無垢の祈りとなって私を包んだ。原爆投下後二十年、今尚原爆に対する憎しみは消えないが、貴重な体験としてこれを回顧する心境である。

新築完成
——玄海の味・生魚料理——
みなと荘
宗像郡玄海町神湊
電話　神湊56番

宗像伝説　其の五十九

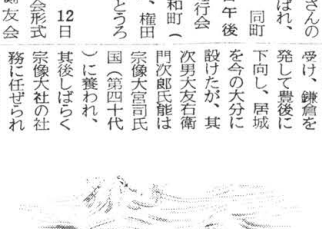
豊後の宗像家と「うわつぶみ」

今から百五十年ほど前、豊後の大友家と筑前の宗像家とは、親密な関係があった。

黒田如水と戦った石垣原で、大友義統の副将としてはなばなしい武勲をたて、社烈なる死を遂げた宗像掃部の事蹟は歴史上の有名な美談となっている。この宗像氏が豊後に移り大友氏の幕下として活動した事実がある。

大分県大野郡犬飼町の奥に宗像と称する小字がある。この地は、代々宗像氏が大友氏から所領を受けて居城した土地である。大友氏の先祖、大友能直は　建久七年正月、豊後豊前の守護職として、源頼朝の命を受け、鎌倉を発して豊後に下向し、居城を今の大分に設けたが、其次男大友右衛門次郎氏能は宗像大宮司氏国（第四十代）に養われ、其後しばらく宗像大社の社務に任ぜられた関係から、北九州の雄族、宗像氏と大友能直とは深い縁が結ばれていた。

大友能直は非常に神仏に信仰が厚く遂に宗像氏の一族を招き、神を重ねて渺く読めるように祥称を作りながら研究を行っていた。そのうちに時の大分県知事玉置猛がこのことを知り、その一部を写させ宮内省に献じ、色々と話題を呼んだ。



宗像家に戻す事が出来た。

その後長い間保存されていたが、明治七年吉良某という学者が、明治七年吉良某という学者が、いろくつき合せ、数年の間苦心に関する一切を司さどらしめ、代々子孫連綿として宗像掃部の世で続き遂に石垣原で戦死を遂げ、その子孫は尚昔の領地大飼の宗像に隠棲し近郷の崇敬を受け幾代か続いて来たが、その家につたわる宝物の中に「上記」と称する物があった。伝に依ると、大友能直いるか明確ではない。しかし宗像氏は現在も尚血縁の人が現存事記日本書紀に誤りがあったとして、古来より伝わる日本の創業の伝説を上古文字に書き「上記」と題して、代々家宝として伝えていったが、この内容が皇室の記録とは非常に相違あるため、外部に対しては絶対の秘密を保ち、宗像家に秘蔵していたということである。

世は徳川時代になり文政年間、突然大洪水がおこり、大野川一帯をおそい深夜眠をさました時はすでに宗像家は大洪水に捲込まれていた。家財を運び出す事はもち出来ない、からうじて宗像家代々の家宝である「うわつぶみ」を主人が肌につけ帯で体に締め上げて洪水と流れる濁流を泳ぎ切ること。しかし大洪水の急流を泳ぎ切ることは出来なかった。それら流れの先祖、大友能直は　建久七年正月、豊後豊前の守護職として、源頼朝の命を受け、鎌倉を発して豊後に下向し、居城を今の大分に設けたが、其次男大友右衛門次郎氏能は宗像大宮司氏国（第四十代）に養われ、其後しばらく宗像大社の社務に任ぜられた関係から、北九州の雄族、宗像氏と大友能直とは深い縁が結ばれていた。

大友能直は非常に神仏に信仰が厚く遂に宗像氏の一族を招き、神を重ねて渺く読めるように祥称を作りながら研究を行っていた。そのうちに時の大分県知事玉置猛がこのことを知り、その一部を写させ宮内省に献じ、色々と話題を呼んだ。

宗像家に戻す事が出来た。

その後長い間保存されていたが、明治七年吉良某という学者が、いろくつき合せ、数年の間苦心に関する一切を司さどらしめ、代々子孫連綿として宗像掃部の世で続き遂に石垣原で戦死を遂げ、その子孫は尚昔の領地大飼の宗像に隠棲し近郷の崇敬を受け幾代か続いて来たが、その家につたわる宝物の中に「上記」と称する物があった。伝に依ると、大友能直が、種々の学者を集めて、我が国の歴史を研究し、日本の歴史の古事記日本書紀に誤りがあったとして、古来より伝わる日本の創業の伝説を上古文字に書き「上記」と題して、代々家宝として伝えていったが、この内容が皇室の記録とは非常に相違あるため、外

（H）

（西日本新聞より）

◇スイカ栽培講習会…14日午後1時、宗像町赤間、富地原公民館、17日午後1時、同町吉武支所、講師は宗像東部農業改良普及所の石井技師。

◇宗像会幹部会…16日午前10時、町村会館会議室、会誌"宗像"の編集打ち合わせ。

◇福間町バドミントン大会…20日午前9時、福間中体育館。一般町民を対象にした勝ち抜き戦。同町公民館主催。

◇旧校舎で最後の卒業式…玄海小南校舎は18日、北校舎は19日それぞれ近く新築校舎にうつるため現校舎では最後の卒業式。

宗像大社献詠 俳句作品集（四十）

津屋崎 久羽 文王
よく笑う八重歯の娘黄砂降る

〃 西住 喜三郎
機械音四囲に高鳴る霜降る夜

〃 毛利 夜潮
揚雲雀野をつっ走る衛生車

〃 占部 河童
黄金の鯉よ寒夜に神話めく

〃 勝田 光一
クロッカス母の寝息のとどき来て

〃 大神 寛
どの影も折れて不況の寒月光

〃 鶴 美津男
家郷行くわれを先導する蝶々

〃 岩見 佳代子
木苺の若芽垣越えある日ふと

〃 井浦 良介
牛乳を噛む新緑に抱かれて

東郷 小野 花居
一人背に幼児と蝶を野道かな

〃 小野 淡坡
雪洞の揺れて雛壇賑へる

厚狭 篠田 南洞
肥桶の音して春の学睡し

津屋崎 白石 百合蔵
芽木林透けて園児の散る駆け足

日立と共に五十年
倉田主税会長の半生記（三）

彼の社長就任以来、今日までの間に、日立製作所の事業がいかに発展し来たったかを見、更にその発展が、彼を最高責任者とする経営スタッフ以下役職員全員の努力によるものであることを知るとき、彼をもって単なる幸運児という言葉でいうことは出来ない筈である。然り、彼は非凡なる経営者であるのだ。

主税は、全く予期しなかった大任を背負うことになって、当惑しない訳に行かなかった。小平を始め、すべて自分の尊敬する先輩たちが一挙に会社を追われたのみでなく、一切、会社に足踏みも許されないというのである。後輩として、このことは自分の体をさいなまれる以上に辛いことであった。主税は、社長就任のお祝いを人から言われるたびに、〃おめでとうとは皮肉なのか、本気なのか〃と首をかしげたく思うのであった。

「どうも、たいへんなことになりました」小平の自邸を訪問して挨拶したとき、主税は心からそう言って恐縮した。

「いや、倉田君、あんたなら大丈夫です。必らず立派にやれる。僕は何もタッチできず、またする気もないが、あんたがやってくれる以上安心だ」小平は、淡々としてそう答えるのだった。彼は追放以後はほとんど一歩も外に出ず、安来工場から送られた斧をふるって、毎日薪割り仕事をし、あたかも三昧に入るような生活をしていた。「倉田君、あんたの所信どおり、堂々とやってくれ給え。つまらぬ遠慮は無用です。職員一同従業員一同のために、先頭に立って会社をよくして下さい。あんたなら絶対にやれる」再びそう言って小平は激励するのだった。主税の胸に、大きな感謝と感激とが渦を巻いて流れたのである。

「誠心誠意、ただ小平さんの精神を生かすのが自分に課せられた使命なのだ」そう決心して主税は日立製作所の今後の運命を自分の双肩に背負う決意を決めた。小平は、常に言っていた。

「天の利は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず――だ」

「事業の繁栄を期するためには寸時も和協一致の精神を忘れてはいけない」

結局、問題は〃人間〃に帰着するのである。技術も才能もすべては〃生きた人間〃〃一個の人間〃を離れて存在するものではなく、また如何にすぐれた技術も、如何に抜群の才能も、その人間同志がてんでんばらばらに働くのでは十二分に力を発揮出来るものではないのである。

主税は小平の口からしばしば聞いていたこれらの言葉を、いや、その精神を実践躬行することを自分自身に誓ったのである。

敗戦ののち四万四千人の人員をかかえた日立製作所全体で、本来の作業に戻っている工場は笠戸一つで、それ以外のところでは全く専門以外のものを作っていた。鍋、釜、食器、皿、さらに鍬、鎌などの農具から木炭、塩、食料品類の製造もしていた。要するに、本来の日立製作所の看板の下では想像もされないような品物が各工場で生産されていた。今から思うとウソとしか考えられないようなことをしていたのであるが次第に本来の姿をとりもどしていった。

全体的に見て、機械工業は他の部門にくらべて復興が早かった。というのは、各産業が生産を再開するに当って、設備の補修、充足を迫られた反面、機械工業がその生産の裏づけとして、膨大な軍需用資材をストックしていたからである。然し、そのストックを喰いつくすと、深刻な資材難に直面しなければならなかった。政府は、二十二年一月から臨時物資調整法を施行して、石炭はじめ十七品目の重要資材に強力な配給統制を断行したのである。日立製作所も六工場が重要工場に指定され、炭鉱用機械類の生産を重点的に行うことになり その結果、受註高、発送高は驚くべき上昇を示した。然し、こうして生産の面で活況を帯びて来た背後には、戦後のインフレーションの滲透は加速度を加え、その前途を憂慮されるようになった。そのため、二十四年には、所謂、経済九原則による〃ドッジ予算〃が成立し、政府は思いきったデフレ政策に移行するに到った。

主税が、最高責任者として凡ゆる事態に対処してベストを尽して経営の衝に当ったことは言うまでもない。主税は、総合経営方式をトコトンまで活用した。即ち、各工場間の生産分野の重点的移動、原材料の集約的利用、操業度の上昇、人員の配置転換など、生産原単価の改善につとめるとともに、生産設備の拡充に努力し企業の積極的な合理化を推進したのである。こうして彼はデフレ時代の苦境を切り抜けようとしたのだ。

社長に就任してから今日まで、主税が最高の経営責任者として嘗めた苦労は筆舌につくせないものがある。勿論、それぞれの部門には彼を補佐する重役はいるけれども、なんといっても最後の責任は彼自身にかかってくるのだ。少なくとも彼自身は堅くそう信じているのである。だから設備の改善、拡充、製品の研究向上、生産力の伸長、販路の拡張――どの一つをとってみても彼の関心の対象でないものはなく、苦労の種に非ざるものはないのである。

然し、人間的に最も苦しみ、精神的に最も悩んだのは労働問題であった。端的に言えばストライキであった。主税が最初にぶっかったのは二十二年の四十七日ストであった。就任後数ヵ月ののちのことである。この年九月、日立労働組合総連合は赤字補填資金要求を会社に提出した。会社はこれに対して回答をしたが総連合はこれを不満とし、九月二十七日以降一斉にストに突入した。そうしておいて更に十月四日には賃金ベース倍額増を要求して会社側に迫ったのである。その頃、労組側では共産党員たちの指導により、スト戦術も巧妙になっていたが、経営者側は全くの経験不足で、交渉をしても事ごとに相手のペースに巻込まれ吊るし上げをされることも少なくなかった。なにしろ戦後アメリカ側の尻押しで、あっというまに強力になった労組のことであるから一つ覚えの公式論を大声にどなるばかりで、現実に即した考え方の出来ない人達であったのだ。交渉をまとめることよりも、如何にして決裂させるかということばかりを考えていたのである。攻める方がそうした速成選手であるのに対し、受ける側がまるっきりの素人であるから勝負は五分五分というわけには仲々行かないのだ。つまり、してやられるのは何時も経営者の側である。気の弱い者は、肩を怒らせて怒号する相手の剣幕に押されて、シドロモドロのことを言い、言質を取られてしまう場合も少なくないのだ。

（つづく）

今昔に想う
松島良吉

梢

現在四十才を境に戦前戦後に別けて考察すると、面白い人間像が生れて来る。こういうと語弊が生ずるかも知れないが、現今の若い人達は私達の想像が及ばない迄に生長したと云うより、老若の感がないと言っても過言ではなかろう第一礼儀と言うものが遠い昔になった感がする。年長者に対し友達同然の態度で接し、それを当然の如く解している。第二に学校教育についても生徒は先生に対し、恩師という観念がなく生徒は先生を、友達以下に見ている。余りに横着であり、目に余るものがあると思う。先生もまるで生徒をお客様扱いにして居られるが、月給取り根生を捨てゝもっと生徒の将来の為、PTAの方々に遠慮せず信念を以って教育に当られて然りではないだろうか。第三に不言実行と言う言葉があったが、現在では忘れられているのではなかろうか、若い人達は口先きは人一倍良く動くが全く自主的行動にはとぼしい様に見受けられる。三面記事の不言実行は困るが如何？

さて昔と言っても二十数年前の徴兵で軍隊に入隊した当時の、若い人達の精神の持ち様は現在の若い人達と、全くうらはらの感があった。今の若い人は若い者〃らしく〃と言う、〃らしさ〃をわすれている様に見受けられる。今一度精神教育の様な立場に於いて、昔の軍隊生活様式にして、満二十才にて社会奉仕隊とでも名称をつけて、男子としての精神教育を兼ねた成人としての区切りをつける機会をあたえて、規則正しい生活を導いて欲しいと思う。そうでなければ将来の日本人はどの様な日本を築いて行くのか、憂慮するのは私だけであろうか。昔の若人の読書にしても立志伝とか偉人伝を読んで、将来の希望に燃えた頃を想像するとき、現在の若人は恋愛小説、エロ本、漫画等に浮かされ実に情けない極みである。若人よ奮起せよと言いたい、街々をより明るい街にする様に、社会悪を追い出して溌溂たる社会を造り出そうではないか、あの東京オリンピックに国家を代表して出場した若人達は、全国民の胸を躍らせた事は感嘆にたえない。

明治維新を築いていった人達は二十代、三十代の人達によってなし遂げられた事を思えば、何事も精神の持ち様で如何なる大事業もなし遂げられるであろう。立派な若人として将来の日本を背負って立つ可く、根性ある人間になってもらいたいと思う。最後に昔明治天皇が軍人にあたえられた五ケ条の御勅諭と言うのがあったので参考迄に、掲げて筆を止めるが、軍人としてゞはなく若い人達の参考になれば幸である。

五ケ条の御勅諭

一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし
一、軍人は礼儀を正しくすべし
一、軍人は武勇を尚ふべし
一、軍人は信義を重んずべし
一、軍人は質素を旨とすべし

植物のはなし

はえとりそう Dionaea muscipula Ellis. もいしもちそう科で「はえぢごく」ともいう。北米北部カロライナからフロリダ地方に自生する食虫植物である。我国への渡来は、明治の中頃だが、園芸上広く栽培を見るに至ったのは昭和になってからのことである。葉の長さ一八センチ内外、一株から普通七、八葉を展開する。葉は葉身、葉柄とも全く別個の形をし、葉身の周辺は鋸歯状をなし、中軸の部分から折畳式に運動を起して捕虫作用を行なう。運動の起因は葉身の半面に三個の絲状突起があって、それに触れると急激に左右から閉鎖するのである。しかし二回以上触れぬと運動を起さぬ習性がある。花は白色五瓣で花期は六月、冬季はフレームで休眠させる。水蘇植として夏も日光直射下で差支えない。

おじぎそう Mimosa dudicaL. はブラジル原産の豆科の一年草。本邦へは天保一二年、和蘭人がもたらした。高さ三〇センチ、葉は合歓（ねむ）に似て四出し、多数の小葉をつける。軽く小葉に触れると小葉のみ左右相合着し、更に強く触れると葉は葉柄の部分から下垂して、恰も眠るが如く或は低頭するが如くで、「ねむりぐさ」とも「おじぎそう」とも言うのである。花は夏、葉腋に咲きでて、球状を呈し、他の豆科の蝶形花冠とは異り絲状穂状花である。朔は豆科らしい形状で数個輪生し粗毛をしく。属名のMimosaは物真似 pudica は羞しがる意。最後に最も複雑な運動を現わす「まいはぎ」（舞萩）についてのべる。

まいはぎ Desmodium gyrans Dc. は印度原産の豆科の高さ一米にも達せぬ矮小潅木である。

中国では古くから「舞草」といった。本邦へは嘉永年間に渡来し、本種の葉に自発性の運動力があるので、「動く植物」として植物学の教材に用いられ有名である。この植物の運動は「おじぎそう」のように接触に依って動くものではなく、温度と濕度との関係によって運動する作用のあるもので、華氏三五度の時八五～九〇秒で、小葉の先端が楕円形に一廻転し、二三度で運動を停止する。

——宗像藪庵先生百話——

南方華やかなりし頃
宗像太郎坊

ジャワせり

ブラスタギーより約十六粁南西に進むと、カバンジャイという町がある。ここも避暑地であるが、近衛の野戦病院（塩原少佐）がある。ここの創立記念日に招待された事があるが、祝宴の徳利・盃・台・腰掛すべて、竹づくりである。副官の伊藤中尉が面白い挨拶をした。「なにも竹づくめだからといって、われわれが薮だとか、竹の子医者という訳でないからご了解を乞う」。見た眼も風流であるし、味も竹の風味がついており、乙なものであった。夜、精神科の医者で結核療養所長をしている人の所へ遊びに行ったら、珍らしく、すき焼をしてくれた。肉は水牛であるが、この辺りの高原に育ったものは脂肪も多くうまい。菜は葱でなく芹が使ってあった。ちょっと、あくが多いようだったが、懐かしくてうまかった。この芹はスマトラでもジャワせりといっているが、学名も同じである。実は日本にある芹もこれと同じである。

芹 Oenanthe javanica は樺太・満州・中国から日本全土・台湾・マレーシア・印度・オーストラリアにまで産する。すこし変形したもので、上部の葉の頂小葉が細く深裂したものを、サケバゼリ Var japonica Honda といい紀伊半島以南・四国・九州・台湾に産する。

カバンジャイより右に曲って進むとときおりバタック族の部落はあるが、うねり続く草原である。ところどころ、四角に耕されて、土の色を現わしている畑があり、パインアップル（ネシア語で、ナナス）を植えている。スマトラは有名なパイ缶の輸出島でもある。句に、

草原に四角四角のナナス畑呼ばはればナナスの山よりバタ頭巾

ナナス葉影ヘツドライトに切り結ぶ

川に来たので休憩しようとトラックをとめて外に出ると、橋の下の濁った川に、年頃の女達が水浴に興じていた。わたしたちを見るとみんな首まで漬って動かなくなった。痴漢と思ったらしい。

さらに行くと六、七軒の部落がある。ご存知のようにドリアンを売っている。路傍でドリアンは果実の王といわれ、女王はマンゴスチンである。トラックを停めて休憩しながら喰べていると、傍で楽器を奏している。見ると孟宗竹を一尺ぐらいの長さに切ったものを半分、縦に割り、皮を絃のように五、六本小さく剥いで浮かせ、唄に合わせてぽんぽんと、指先で鳴らしている。窮すれば通じるもので南洋の土人はなにかで楽器を作っている。彼等は音楽が好きである。総じて早死にであるが人生を楽しく過ごしている。

自動車で行く道道面白いと思うことは、飼い放しにしてある鶏が人家の生垣の下や、路傍にいて、ちゃんとその侭にしておればなんでもないのに、必ず自動車の前を横ぎって反対側に馳けて行くことである。それでたびたび鶏を轢殺したものである。自動車をめったに見ないせいだろうかと思う。首を轢かれたのを、トラックの上から見ていると、むやみやたらにぴょんぴょん跳ねあがって実に面白い。

やがてコタチャネに着く。メダンより約一七〇粁である。ここはラウアラス河に望み、平野の町である。病院・郡役所・警察署がある。これは後の事であるが、この署長に男の子が生れ、わたしに命名してくれというので、亜細亜の男という意味で「アジタロウ」とつけてやったことがある。町には沢山のオランダ人俘虜（一部、英人）が先着していた。ここはかれらにとっては忘れられない降伏の地である。

（つづく）

（一面より）

田島 白雲 山人
恵まれぬ人をはげます森繁のラジオの声はやさしく強し

福間 森 八蔵
春の朝小鳥の声に誘われて老も杖曳く土産の神

田島 大野 宗康
春日より卒業証書持てる子等巣立姿は美しきかな

名島 久保 房江
巻き終へしすしのにおいのこもりゐる厨に坐して春雷をきく

吉武 原田 松代
寒けれど古木の梅はほころびぬ春忘れずに匂ふ梢に

〃 原田 リノ
家ぬちより外がぬくしと呼ぶ夫が日のあたる縁の下に莫蓙しく

東郷 有吉 春子
切り置きし白菜小さき花つけぬ流し台の下仄暗き中に

二月歌追録

武丸 立石 昇
おさ欄間透し入りくる陽のひかり天井に映へて木影乱舞す

〃 立石 ろせの
エジプトの古代の文化を偲びつつタンカーメン展人混みに見る

吉留 白木 うめの
お互ひの煩雑な家事のがれ得て山の湯に来し女三人

吉武 原田 松代
朝戸くる縁に気付けば軒先にかゝりて淡き残月のあり

〃 原田 リノ
庭先のくぼみにゆうべ溜りたる雨水にうつり昼の月白し